

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520169

研究課題名(和文) 近世近代を通貫する十九世紀小説史の構築へ向けた 絵入小説 の書誌学的研究

研究課題名(英文) Bibliographic study which aims to build a history of the 19th century novel by <EIRI BON>

研究代表者

高木 元 (TAKAGI, Gen)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：00226747

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、我が国における大衆読物の大きな特徴の一つである 絵入小説 に注目し、出版メディアが製版(木版)から活版(活字)へと大きく変貌を遂げた幕末明治期における小説史を明治維新で劃期せずに記述することが目的であった。しかし、予想外にも、明治初期資料の所在情報が不足しており、調査には時間と情報が不可欠であるため、研究体制を立て直すべく、最終年度一年前申請をしたところ、幸いにも認められたので、継続してこの課題に取り組む。

研究成果の概要(英文)：This study will focus on the characteristics of Japanese literature popular fiction that is accompanied by illustrations. The end of the 19th century, the printing method change to typography from woodblock printing. I want to build a Japanese literary history that is not separated by the Meiji Restoration. However, the research material and the time of research is not enough, so I decided to try to rebuild the research system.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学・近世文学

キーワード：日本近世文学 日本近代文学 日本十九世紀文学史 切附本 草双紙 絵入本 出版メディア史

1. 研究開始当初の背景

従来の文学史研究において、近世(江戸以前)と近代(明治以降)とは明治維新という政治変革に拠って劃期されて論じられてきた。この思考法は一般に受け入れられて久しく、高校国語でも古文と現代文とを劃期するのに適用されている。しかし、改めて考え直してみると、政治体制の変革が人々の読書生活を直ちに一変してしまうことなどあり得ないはずである。

近世と近代とを通貫する絵入本としては読本や草双紙と呼ばれるジャンルが在るが、これらの明治期に於ける出版流布状況に関する精確な調査は未だ行われたことがない。とりわけ文学史用語が混乱している明治期の草双紙に関しては、実態に則した再定義と分類整理が不可欠である。

明治初期の戯作に関しては、先ずは在野の好事家達によって取り上げられた。三田村鳶魚「明治年代合巻の外観」(「早稲田文学」明治文学号、1925年3月)や野崎左文『私の見た明治文壇』(春陽堂、1927年)などである。一方、学問的に対象化されるのは文学史書が出されるようになってからで、本間久雄の日本文学全史10『明治文学史』上(東京堂、1935年)などでは、明治文学史の出発点として開化期の小説が位置付けられた。柳田泉の『随筆明治文学』『続随筆明治文学』(春秋社、1938年)などにも多くの情報が記されている。

さて、十九世紀末を幕末維新时期と規定して、先駆的な戯作小説の研究を進捗させたのは興津要であった。早くに、明治文学全集『明治開化期文学集』1、2(筑摩書房、1966年)で丁寧な解題を付した活字翻刻を公刊し、その後『明治開化期文学の研究』(桜楓社、1968年)、『転換期の文学 江戸から明治へ』(早稲田大学出版部、1977年)などに研究成果をまとめ、さらに角川選書76『新聞雑誌発生事情』(角川書店、1983年)、有隣新書46『仮名垣魯文 文明開化の戯作者』(有隣堂、1993年)など多くの一般向きの啓蒙書を出している。十九世紀末を幕末維新时期と括って、文学史上埋もれていた戯作者達の伝記研究を中心として精査し、何よりその成果を一般向きに紹介した功績は大きい。ただし残念ながら、この時期の戯作者達の低俗性を強調するに性急であった感は否めない。

また十九世紀と謂う括り方はしていないが、出版メディアや文体や享受史などの視点から、近世近代に架橋して新たな文学史の構築を志した前田愛『幕末・維新时期の文学』(法政大学出版局、1972年)や『近代読者の成立』(有精堂、1973年)なども先駆的な仕事として貴重である。

その後、久しく取り上げるべき仕事が途絶えていたが、近年、明治期の草双紙に関しては佐々木亨によって着実に研究が積み重ねられて来ている。佐々木亨「明治の合巻 所謂明治式合巻と東京式合巻なる名称をめぐ

って」(徳島文理大学文学論叢 12、1995年)や「『鹿兒島実記一夕話』と『鳥追阿松海上新話』 大倉孫兵衛の戦略」(国文学研究 127、1999年3月)、「『鳥追阿松海上新話』の読者の成立 新聞の宣伝効果」(国文学研究 130、2000年3月)、「『高橋阿伝夜刃譚』初編に於ける諸問題 書誌とジャンルを中心に」(国文学研究 148、2006年3月)、「活版草双紙の誕生 大阪版より藍泉の独自性に及ぶ」(国文学研究資料館紀要 文学研究篇 32、2006年)、「『岡山紀聞筆の命毛』論」(江戸文学 35、2006年)など、興津要に師事して得た学問を批判的に継承した一連の優れた仕事がある。

さて、特筆すべきは国文学研究資料館のプロジェクト研究として取り上げられた仮名垣魯文研究の劃期的な進捗である。この研究課題は、2004-2007年度の基盤研究(B)「原典資料の調査を基礎とした仮名垣魯文の著述活動に関する総合的研究」(代表国文学研究資料館教授谷川恵一)としても採択され、近世と近代に跨って活躍した仮名垣魯文の生涯にわたる活動の通史的調査研究に拠って、その全貌が初めて明らかにされつつある。この研究は、近世文学研究者と近代文学研究者との共同研究に拠って初めて可能になった。申請者もこのプロジェクトに加わり、多くの刺激と情報を得ることが出来た。拙稿「鈍亭時代の魯文 切附本をめぐって」(社会文化科学研究 11、千葉大学大学院社会文化科学研究科、2005年)や「魯文の売文業」(国文学研究資料館紀要 34、2008年)、「魯文の艶本」(国文学研究資料館紀要 35、2009年)などは、その成果の一端である。

2. 研究の目的

従来から近代における近世文学 受容 について関心があり、早くに拙稿「江戸読本享受史の一断面 明治大正期の翻刻本について」(拙著『江戸読本の研究 十九世紀小説様式攷』所収、ペリかん社、1995年、初出は1991年)や、「近世後期小説受容史試論 明治期の序文集妙文集をめぐって」(『明治の出版文化』所収、臨川書店、2002年)など、また草双紙史についても「草双紙の十九世紀 メディアとしての様式」(『江戸読本の研究』所収、初出は1993年)や、「草双紙を研究すること」(拙編「江戸文学」35、ペリかん社、2006年11月)などを発表してきた。

これらの持続的な問題意識から、近世と近代を劃期せずに十九世紀として繋ぐ文学史の記述の必要性の自覚へと向かうのは自然の成り行きであった。とりわけ、絵入りの大衆小説ジャンルとして息長く続いた草双紙は、明治20年代に入るまで出し続けられているにもかかわらず、その終焉期については十分な研究が備わっていない。

早くに石川巖『明治初期戯作年表』(従吾所好社、1927年)や、山口武美『明治前期

戯作本書目』(日本書誌学大系、青裳堂、1980年)などの書目年表が編まれており、これらに拠って全体的な見取り図が把握できる。しかし現存資料を網羅したのではなく、かつジャンル分けや呼称については多くの問題を孕んでおり、各標目については再吟味が不可欠である。また、両書の最大の問題点は所蔵先が記されていないことである。恐らく個人蔵書の調査に拠ったために刊行時点では所蔵先を明示できなかったのかもしれないが、書目年表類が所蔵先を明記しないという悪しき伝統は、山崎麓『日本小説年表及総目録』(1929年)でも同様であった。さすがに『国書総目録』(岩波書店、1963年)はユニオンカタログである故に所蔵機関名が記されている。慶応年間迄しか扱わなかった点が惜しまれる。

基礎的書誌資料が欠陥を孕んでいるのは、幕末期の切附本や明治期の草双紙は文学的価値の低いものとして価値も認められず、図書館や大学などでの蒐集に関しても等閑に付されてきたという経緯があった。いずれにしても、幕末明治期の絵入本資料に関しては、その所在情報が決定的に得にくい。ただ、『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』

第四巻語学・文学の部(1973年)は請求番号をも記してあり貴重であった。明治期の本は以前から貴重書扱いで閲覧しにくかったが、近年「近代デジタルライブラリー」として画像データがインターネット上に公開されて大変に便利になった。ところが、マイクロフィッシュからの電子化であり、色や大きさが不明であるほか、解像度が低すぎて判読できない部分が多い点が残念である。一方、雑誌や新聞に関しては東京大学法学部「明治新聞雑誌文庫」の『所蔵目録』(1977年)が完備され、同文庫に所蔵する図書資料も利用しやすくなった。

このような研究状況の中で、機関別ではなく所蔵先を明記した後から検証可能な書目年表の整備が求められているのである。

そこで本研究課題の目的を、幕末明治で劃期しない通史的な絵入本の目録を作成することにした。この目録が完成できれば、そのまま文学史の書き換えに直結するといっても過言ではないだろう。

3. 研究の方法

まず、嘗て公表した幕末期の切附本に関する書目の整備をする。その上で、『明治前期戯作本書目』等の書目に拠りながら明治期の草双紙の書誌調査に着手する。

より効果的に調査を進めるために、現存本の書誌学的な吟味に拠る、版式の種類を試みる。その際、製版本に関しては合巻と明治期草双紙とに分け、活版本は全丁に絵が入っていないことから草双紙とは分類せずに広義の戯作として扱う。そして、今回は主として、木板本を中心に調査研究を進め、資料の所蔵先を博搜して明記することに

拠って、以後の研究において検証可能な基礎資料としての書目を作成したい。

近世期に草双紙と同じ体裁で出された切附本は、鈍亭魯文『將門一代記』(安政2年)のように全丁絵入りのものも含んでおり、その形態から明治期の草双紙の板面を先取りしたものと位置付けられる(拙稿「末期の中本型読本 いわゆる<切附本>について」、『江戸読本の研究』第二章第五節所収)。すなわち、この切附本は明治期の草双紙研究の前提とすべき情報となるもので、最新情報を書目年表として整備しておく必要がある。嘗て発表した拙稿「切附本書目年表稿」(『江戸読本の研究』第二章第六節所収)は1995年時点のもので、その後の継続的な資料蒐集と調査とに拠り、追補修正すべき少なからざる書誌情報を発見しているため、まずこの書目の整備から取り掛かりたい。

次に明治期に入ってから出された近世期合巻の後印本についての調査が必要である。基本的には同一板木が用いられた後印本ではあるが、多くの場合、別の板元に板木が売られている。そのために、初板時に付されていた合巻の錦絵風摺付表紙が黄色無地表紙に文字題簽を施したものに換えられており、時には改題されている場合もある。これらの近世期合巻の後印本が、明治何年頃まで何処の板元に拠って摺り出されていたか、という問題は受容史として重要である。この調査は「合巻年表」が完備されていない現状では甚だ難しいのであるが、取り敢えずは、明治期まで刊行され続けた長編合巻に付された奥目録(巻末に付された蔵板書目や広告)を、同板の後印本を探し出す手掛かりとする予定である。

また、明治初期に刊行され流布している絵入本の種類についての分析と分類とが不可欠である。従来の研究が存するものとして、渥美清太郎「歌舞伎小説解題」(『早稲田文学』261、1927年10月)が挙げられる。これらは正本写と呼ばれている歌舞伎筋書風の内容を以て、役者似顔絵で挿絵が描かれることの多い合巻体裁の絵入本である。この正本写も近世近代を通じて出されているものであり、やはり書目化をしておく必要がある分野であるだろう。これに加えて、所謂銅版絵本に関しても目を配る必要がある。十九世紀末の整版本から活版へというメディアの変遷史には、その中間項として銅版を位置付ける必要があるからである。さらに、上方に多いと思われる合羽摺絵本については纏まった研究はなく、これらの調査蒐集に努めなければならない。

この外にも、百人一首もの英雄絵本 戊辰戦争ものなどと呼ばれる出版物も少なくない。これらの様々な絵入本の調査と蒐集とを通じて、明治初期における絵入本全体の見取り図作成するための分析をする必要があるだろう。

明治10年代に、特定の板元から出された

合巻とは異質な明治期草双紙がある。この明治期草双紙とは、岡本起泉『其名も高橋毒婦の小傳東京奇聞』(全五編、明治十一年六月、綱島亀吉板)など、一編が9丁3巻(冊)から成るとい形式を持ち、美しい口絵を備えたもので、主として明治10年代に刊行されたものである。内容的には新聞の続きものを題材とするという特徴を持っている。これらの原本の巻末に付された奥目録に基づいての所蔵調査と書誌調査を主として行い、可能であれば複写して内容的な吟味を加えて初出の新聞記事との比較検討を試みたい。特に、従来注目されることのなかった「芳川俊雄関・岡本起泉著、綱島亀吉板」という一連の明治期草双紙について調査研究する。この構想に至った過程については、「文学」(岩波書店、2009年12月)の拙稿に詳しく記した。

一方、明治期に入ってから新刻された万亭應賀『明良双葉艸』(全八編、明治16~21年)の如き木板の合巻が、どの程度の標目数存在したかについては、その全体像を解明する必要がある。形態的にも10丁1冊で摺付表紙を備え、漢字仮名交りの文章を持ったもので、全丁絵入りであるという合巻の特徴を保存している。板元なども一定程度限られていたものと思われる。しかも内容的には実録などの抄録が多いと思われるが、その全体像は明らかになっていない。これらは近世期の草双紙と特に区別する必要はないが、もし明治期のものを特定する必要がある場合には、文字通り明治期合巻と呼ばれば良いと思われる。ただ、国会図書館に所蔵されているものは〔絵本〕と表題されていることが多い点には注意を要する。

これらの明治期合巻は、早稲田大学図書館蔵柳田文庫と国会図書館以外で纏まって保存されていることが少ない。時に地方都市の市立中央図書館などで郷土資料として寄贈されたものが保存されていることがある。これらの所在調査には多くの時間と労力とを費やす必要があるだろう。

4. 研究成果

近年蒐集してきた読本や切附本を主とする絵入本の画像データと書誌データとをデータベース化した。

明治期草双紙に関しては既に蒐集してある画像データに基づくデータベース化を進めた。折から佐藤悟氏に拠る労作『正本写合巻年表(正本写合巻集・別冊)』(国立劇場調査養成部)が出た。歌舞伎の草双紙化に関する文学史についての劃期的な成果であり本研究計画でも大いに参考にした。

ギメ東洋美術館の図書室に後期読本の挿絵だけを集めて綴じ直した本が大量に所蔵されていることが分かり、急遽パリに出向いて全部を調査させて頂いた。細かい分析を待たなければ精確なことはいえないが、明治二十年代、貸本屋が活版本の出版に押されて廃

業しつつあった時期、欧州でのジャポニズム隆盛を見た古本業者が斯様に改竄改装した商品を欧州にもたらしたものと推測する。これからデータを分析して絵入小説の末路としての位置付けについて考察を深めたい。

管見に入った範囲ではあるが、二代目岳亭梁左の著編述書目の調査結果を発表した。その後、全南大学文化社会科学大学の康志賢氏の手によって全体像が明らかにされつつある。これも明治期合巻などを含むもので近世と近代とを架橋する研究である。

明治期草双紙に関する内容的な研究にも着手したが、掲載されている新聞の名前や年月日が不明なものが多く、実際に通覧して確認するしかない。その上、初出の掲載紙であると思しき「さきがけ新聞」などを揃って所蔵している機関がなく、調査が難航している。

斯様に明治期資料の所在情報を得ることが予想以上に難しい。近世以前のように『古典籍総合目録』のごときユニオンカタログが存在しないからである。CiNiiやwebcatをはじめ、実際に各大学図書館のOPARCで検索して始めて分かる場合も多く手間暇が掛かる。

だからこそ本研究テーマの「絵入本データベース」が必要なのである。なお一層、情報の蒐集と調査に精を出したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

高木 元、書物のリテラシー、査読有、62巻4号、2013、pp.10~22

高木 元、合羽摺草双紙『里見八犬伝』
解題と翻刻、千葉大学「人文研究」、
査読無、42号、2013、pp.179~203

高木 元、明治期合巻『里見八犬伝』 -
解題と翻刻 -、千葉大学「人文研究」、査
読無、41号、2012、pp.299~323

TAKAGI, Gen、L'illustration des romans
populaires au Japon aux XVIIIe et XIXe
siècles, Arts Asiatiques Tome、査読有、
Vol.66、2011、pp.27~46

高木 元、『當世八犬伝』 解題と翻刻、
千葉大学「人文研究」、査読無、40号、
2011、pp.245~258

高木 元、二代目岳亭の遺業、千葉大学
大学院人文社会科学研究所「人文社会科学
研究」、査読無、23号、2011、pp.16~
29

〔学会発表〕(計4件)

高木 元、書物のリテラシー、招待、日
本文学協会大会、2012年12月02日、国
学院大学

高木 元、絵入本の魅力 - 板本の特性、
板本・板木をめぐる研究集会 - 和本の魅

力を再検討する -、2012年2月5日、立
命館大学アート・リサーチセンター

TAKAGI, Gen, Bookmakers and the
Publishing Systems of Nineteenth- Century
Japanese Fiction (造本から見る江戸読本
の出板システムについて)、Joint
Conference of the Association for Asian
Studies and International Convention of Asia
Scholars、2011年3月31日、コンベンシ
ョンセンター ホノルル(ハワイ)

TAKAGI,Gen、Les illustrations dans les
romans populaires (yomihon) à la fin de
l'époque d'Edo (読本の挿絵) 招待、フ
ランス国立極東学院(EFEO)ワークショッ
プ、2010年11月18日、フランス国立極
東学院(パリ)、

〔その他〕

<http://www.fumikura.net>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

高木 元 (TAKAGI GEN)
千葉大学・文学部・教授
研究者番号 : 00226747